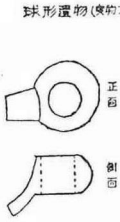
「扶餘出土의 戟에 對하여」補記

洪 思 俊

本誌 第五卷 一〇號에 拙考 標題의 銅製遺物에 對하여 아래와 같이 梅原 敎授에게서 鄭幹事앞으로 來信이 있었다。

「中國漢代に 行はれた 鏖のうちの 一型式存る 所謂S字形での 發達した 一種の 一對の 一方であって 中央にある 二孔は 銜とひき手との爲の孔であるわけであります 北方系の文物の 系統だと考えられているものであります。半島では なほ發見例に 乏しい ことですが 古く 慶州から 出土したと傳えるものが「南朝鮮の漢代の遺跡」にのせであります。こう云う古いものが 扶餘から 現實に見出されたこと——勿論 出て然る可きものでありまするが——は 中國からの船載品と 認められるもので 興味を 覺えることであります……」라는 異見이 있다。또는 博物館報第六號(朝鮮總督府博物館 昭和九年三月發行)平安南道大同郡龍岳面 上里 遺蹟調査報告九P.에는「(14) 鐵製鏖(第十七・十九圖) 推定復原長 二五cm……稀少하기는 하나 樂浪地方에서도 發見되었던 金銅製、所謂 푸로페라形의 鏖의形을 찾아 볼 수 있다。當初는 녹(銹)이 슬은 關係로 仔細히 알 수 없었으나 녹을 除去하고서야 双孔이 있음을 밝히었고 그 全形도 上記와 같이 推定할 수 있었다」云云。

그런데 字源(日本字典)附圖 武備類條 戟圖를 보면  形으로 되었다。今番出土物은 靑銅製  形體만 殘存한 것으로 본 것이다。



却說 一九六四年 一〇月一三日 前記遺物이 出土된 附近場所에서 球形遺品(別圖)이 發見되었다。그 一部에 길이 一cm 幅一・二cm의 突起物이 附着되었으며 이 突起物을 前後해서 球에 直徑一・二cm의 圓孔이 뚫려있다。이 小品도 S形 遺物과 무슨 關聯性이 있을가 하여 補記하여 둔다。

以上 異見과 鐵製鏖의 報告書가 있었음을 밝히고 다시 遺物이 出土되었음을 紹介한다。

海印寺通信(一)

孟 仁 在

海印寺 經板庫의 補修工事는 數年來 問題되어온 蓋瓦의 重要性에 비추어 板庫(北閣)의 施工과 蓋瓦의 製作을 分離、別途工事로서 推進시켜 왔다。

이 두 工事는 모두 昨年 六月二十九日과 四月二十五日(蓋瓦)에 契約되었으나 豫定보다 늦게 着工되었고 着工後에도 豫期치 않던 技術的 難點에 부닥쳐 相當期間 陣痛을 겪지않으면 안되었다。그리하여 板庫(北閣)보다 着工이 先行된 蓋瓦의 製作完了(九月三十日限이었음)를 기다려 十月末日까지는 板庫의 葺瓦 및 施工을 完了한다는、即 海印寺經板庫補修一次工事를 完了한다는 相互 有機的으로 計劃된 工程은 轉回를 免치 못하였다。

여기다가 지난 十二月 十八日에 새로이 契約을 맺은 南閣 및 東、西齋를 包含하는 第二次 工事의 着工을 보았었고 곧 이어 蓋瓦製作을 除外한 施工은 十二月 二十九日附로 中斷指示를 한채 積雪期를 맞이하였다。

昨年 十月 十日 初結氷을 보인 以來 現地의 추위는 일찍 닥쳐왔으나 其間의 氣溫은 十二月 一日의 -5°. 十二月 十二日의 -10°. 一月十一日의 -12°. 程度였고 一月 二十八日의 낮 氣溫은 零上 10°로 上昇하고 있었다。三方이 伽倻諸峯으로 둘러싸인 現場 晝夜의 氣溫差는 크며 밤에는 찬反面 낮에는 比較的 高溫이 持續됨으로 요즈음도 中斷을 무릅쓰고 治木作